



京都市文化観光資源保護財団

会報

No. 45



もくじ

京のよさをまもって(8)「京料理」

京都料理組合 組合長
大聖寺門跡

北村多造 P 4
花山院慈薫 P 6

古い寺に住んで <22>

京のみちを歩く <5> 「賀茂堤から大田神社へ」

目で見える京の文化財 No.15 「祇園祭と町会所」

わたしと京の文化財(12)「ほこの上」 昭和60年長刀鉾稚児 笹岡隆平 P 10

京の伝統行事芸能 ⑧「賀茂競馬」 賀茂競馬保存会々長 阿部 信 P 12

保護財団の活動

P 14

会報題字 理事長 佐伯 勇
表紙 祇園祭礼図(部分)屏風
蔵・(財)八幡山保存会・京都市指定

会	報
No. 45	61. 5. 1

編集・発行

財団 京都市文化観光資源保護財団
法人
京都市左京区岡崎最勝寺町京都館内
〒606 電話 075-752-0235 (代)

募金にご協力いただき ありがとうございました

寄付者芳名録（敬称略）60. 11. 18～61. 3. 31

— 法人及び団体の部 —

〔特別会員〕

※株式会社 住友銀行	<2,300万円>
※住友信託銀行株式会社	<1,500万円>
※三菱信託銀行株式会社	<1,430万円>
※株式会社 三菱銀行	<1,300万円>
※安田信託銀行株式会社	<1,000万円>
※南海電気鉄道株式会社	<750万円>
※伏見信用金庫	<750万円>
※株式会社 京都新聞社	<740万円>
※日本信託銀行株式会社	<425万円>
※株式会社 村田製作所	<303万円>
日本製薬団体連合会	<300万円>
※株式会社 日本交通公社	<200万円>
※株式会社 都ホテル	<200万円>
※任天堂株式会社	<150万円>
※財団法人 伝統文化保存協会	<100万円>
京都青果合同株式会社	<50万円>

〔普通会員〕

※旅館 松葉亭	<16万円>
※株式会社 曽根商店	<14万円>
※土屋便利堂	<13万円>

〔賛助員〕

※ヤマカワ株式会社	<7万8千円>
※山崎建設株式会社	<6万円>
東邦炭素工業株式会社	<1万円>

— 個人の部 —

〔特別会員〕

※伊 砂 利 彦	<150万円>
※田 中 長 兵 衛	<50万円>
※梅 岡 大 祐	<37万8千円>
※岩 佐 氏 熙	<25万円>
※丹 治 富 蔵	<25万円>
※井 上 嘉 久	<20万円>
※池 田 喆 一	<17万4千円>
※伊 藤 ナ ツ エ	<15万円>
※岡 本 保 止	<14万7千円>

※奈良 行 博	<13万円>
※高 橋 一 男	<11万7千円>
※今 井 栄 一	<10万5千円>
寺 田 穎 子	<10万円>

〔普通会員〕

※原 山 喜 代	<9万5千円>
※三 原 慶 三 郎	<8万7千円>
※村 田 陶 苑	<8万5千円>
※上 野 山 志 津 子	<8万円>
※柴 田 二 郎	<8万円>
※都 築 久 美 子	<8万円>
※加 藤 雅 一	<7万6千円>
※児 玉 誠	<6万8千8百円>
※大 嶋 真 治	<6万2千円>
※岩 佐 静 子	<6万円>
※瀧 野 久 太 郎	<6万円>
※戸 田 紀 一	<5万1千円>
※辨 官 弘 晃	<4万8千円>
※内 田 和 正	<4万5千円>
※松 嶋 浩 子	<4万4千円>
※安 田 孝 夫	<4万3千円>
※平 野 昭 子	<3万3千円>
※青 木 文 子	<3万2千円>
※遠 藤 伊 之 助	<3万2千円>
※大 鋸 嘉 夫	<3万2千円>
※上 田 真 一	<3万1千円>
※岩 井 貞 三	<3万1千円>
※大 野 健 三	<3万円>
※田 井 四 郎	<2万9千円>
※松 嶋 芳 子	<2万9千円>
※西 原 寿 子	<2万8千円>
※平 野 和 彦	<2万4千5百円>
※金 井 利 夫	<2万4千円>
※木 原 滋	<2万4千円>
※田 尻 正 雄	<2万4千円>
※田 村 彰 敏	<2万2千円>
※野 村 幸 三 郎	<2万2千円>
※盛 田 准 子	<2万2千円>
※山 田 順 三	<2万2千円>
※福 島 善 孝	<2万円>
※山 崎 次 策	<2万円>

〔賛助員〕

※佐 村 伸 一	<1万9千円>
----------	---------

※野 村 鉄 治	<1万8千5百円>
※谷 美 千 代	<1万8千円>
※梶 村 ふ み 子	<1万6千円>
※橋 本 貞 造	<1万5千円>
※渡 辺 き く	<1万5千円>
※高 広 康 子	<1万4千8百円>
※寺 嶋 瑛	<1万4千円>
※西 田 實	<1万4千円>
※宮 崎 卓 郎	<1万4千円>
※並 河 百 合 子	<1万3千円>
※澤 田 周 一	<1万2千円>
※小 林 文	<1万円>
次 田 勉	<1万円>
※中 山 正 子	<1万円>
※内 山 義 一	<9千円>
※古 川 寛	<9千円>
※野 阪 喜 一 郎	<8千3百円>
※福 崎 勲	<8千8百円>
※岡 本 直 三	<7千円>
※岸 本 幸 子	<7千円>
※佐 藤 昭 夫	<6千5百円>
※川 村 弘 子	<6千円>

※北 口 貴 美 雄	<6千円>
※長 岡 満	<6千円>
※林 寛 子	<6千円>
※細 川 満	<6千円>
※横 田 与 一 郎	<6千円>
岸 田 源 寿	<5千円>
※篠 原 茂	<5千円>
※上 田 と 志	<4千円>
※小 川 利 子	<4千円>
※高 橋 せ い	<4千円>
渡 辺 昭 甫	<3千円>
久 郷 利 子	<3千円>
※折 杉 勝 美	<2千円>
石 田 裕	<1千円>
稲 田 芳 子	<1千円>
中 井 カ ズ 子	<1千円>
米 田 勝 枝	<1千円>

※印は、追加寄付の篇志者、寄付金額は累計額。なお、昭和61年4月1日以降の寄付者の方につきましては紙面の都合により今後順次紹介させていただきますので御了承下さい。

京都の文化財をまもる 5億円募金にご協力を

— 京のよさをまもるこの運動への参加を

あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい—

当財団では、現在5億円募金運動を全国的にすすめています。

京の四大大行事をはじめとする京都の文化財をまもる5億円募金を達成するために皆様も金額の多少にかかわらずご協力をお願いいたします。

○基金にご協力いただきます場合は、同封させていただきます納付書によりご送金下さい。

募金その他についてのお問い合わせは、当財団事務局まで

(075)752-0235(代)



京のよさをまもって (8)

京料理

北村多造

京料理、其の歴史は、非常に古い。桓武天皇が、京都に都を定められてから明治維新に至る迄、「約千年間」京都はあらゆる文化、文明の中心地であったといっても過言ではないと存じます。その王城の地で、生まれた伝統ある京料には宮廷料理として発達した (1)「有職料理」

京都には各宗門の大本山がたくさんあり、各々寺院で作られる野菜を主として材料にした (2)「精進料理」

京都にはお茶のお家元がありお茶事の時に出来る (3)「懷石料理」

この三つに大別されると存じます。即ち、(1)宮廷料理として発達した「有職料理」とは、式典(大郷食)、天皇の即位や大臣になった時の祝膳等に出される豪華な宴会料理。又、日常の天皇の御膳(平安時代は朝夕二回)は、順徳天皇のころから現在のように三回(朝昼晩)出されるようになった。その材料は、京で採れるものは勿論の事ですが、各地の領主が献上した種々の珍味がたくさんあったといわれる。なお、王城の地であった為に……、各地より匠と称せられるいわゆる、其筋の名工、名人が数多く京の都に呼び寄せられたといわれています。

(2)寺院で僧侶の手により、野菜物を主として作られた「精進料理」。現在では、あまり厳しくないが、昔は戒律により非常に厳しかったと聞く。各宗派の大本山で作ら

れる料理は、一年や二年の修業僧ではなく、五年或いはそれ以上修業を行なった僧が、主になって作るそうで、坐禅を組んでも腹痛や下痢をしていたのでは瞑想にふける事も出来ず、心よりの修業が出来ない。料理を作る心掛けとしては、(1)柔らかく(2)清潔で(3)栄養のある(4)消化のよいそして(5)おいしいものを作る。これが、禅の修業に入る第一歩である。だから、食べる物を一番大切にすると……。

最後に、「懷石料理」。これは、お茶事の時の料理で、初めは石を暖めて懷ふところに入れ、空腹を暖める為に使った温石おんじやくの意味で、むしろしない程度の軽い料理をいう。お茶事では、今でも本格的な懷石料理が行なわれているが、世間一般ではだんだんと時のたつにつれて、華美に流れ今では宴会の宴席料理と間違えられるような豪華な料理が出されるようになった。

しかし、現在ではあらゆる交通機関が発達して、北海道で朝食、京都で昼食、九州で夕食、日本列島いつでもどこでも食べたいと思うもの、意のままというほど距離間がなくなりました。それだけ、全国的にこれはこれとは珍重される



何百年にわたり伝統が伝えられている京料理。今もたえずみがかれ、いきづいている。



一式包丁 京料理の伝統を物語る包丁さばき。

事がなくなり、よほど努力をしないと取残されたり、時代の勢いに流されたりまた名物でもあちらこちらで手に入るものは、名物でなくなったりいくら京料理で御座居ますと頑張ってみても、浜で取りたての生造りや天然の生ものをすぐに料理したものには、どうしてもかなわない。そこで京都人が考え出した智慧は、入って来る素材を技術と工夫によりうまくアレンジして、京名物にするという持たざる者の生活の智慧を自ら身につけて、「京に生きる味」として、何百年もの長きに亘り、伝えて来たのです。即ち、若狭(日本海)で取れる鯖さばを京に持ち込み「鯖姿ずし」として売り出し、九州で取れる「鰻」も初めは骨が多くてその調理方法がわからぬ為に、「かまぼこ」にしか利用されなかった鰻も一度、京都人の手に掛かると「鰻の骨切り」として、口に入れても骨がさわらぬ程細かく包丁を入れて高級京料理に変える。その他、京生ゆば、京生麸、大徳寺納豆や嵯峨豆腐等伝統と技術は、親から子へ、子から孫へと(1)口伝(口から伝える)(2)見学(いわず語らずに毎に側についていて覚える)(3)書伝(古書及び先祖の残した書物で勉強する)(4)技術指導等、色々な方法

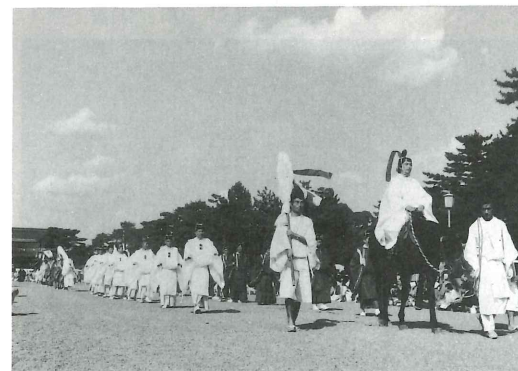
で幾百年も伝えられた料理や名素材がたくさんあります。

又、特に京都は四季の変化に富み、夏は暑く冬は厳冬になる為、嗜好が発達して自ら味覚に厳しくなるというのも京都人の特色である。世界的に、今や日本料理というのは大流行をしている。それは(1)見た目に美しく(2)栄養のバランスが取れていて(3)低カロリーであり(4)おまけにおいしいからだという。テレビや自動車や電子工学や医学だけでなく、食べ物に於ても今や世界の最高の食べ物として認められつつある。

もののたとえに、目は一代、耳は二代、舌は三代という言葉があります。だから、舌をつくってくれたのは私達の祖先が、日本食即ち日本料理という素晴らしい欧米人も真似しつつある食べ物を作ってくれた国に住んでいるのですから、もう一度日本の食べ物について深く考えて頂くようお願い致します。

私達料理にたづさわる者も、これからは日本料理のみならず世界の料理として色々と研究、研鑽する覚悟であります。

(京都料理組合 組合長)



時代祭には、京都料理組合の人達により神饌物が奉献される。



古い寺に住んで

〈22〉

花山院慈薫

からたちと五筋の築地に囲まれた大聖寺門跡に五才で入門してから幾星霜、小学校へ通っていた頃の寺の表は三本の老松と向い側の同志社の柳が枝を垂れた三間巾の寂しい道でした。大正13年頃、市電が通る為、都市計画に依り六間余をとられたので止むなく客殿と使者の間を取り壊し、火の見櫓^{やぐら}の付いた大台所も簡素にし、正門は今の巽^{たつみ}に移された。併し、御本堂は天明の大火後の仮建ちで狭く、仏事は何時も客殿が代用されていたので師の石野慈栄門跡は、かねて念願の本堂再建を決心され、宮内省へ願い出て旧青山御所の一部を下賜される事となったものの、壇家もなく大正時代は主に婦人会員の力に頼っていたので浄財集めにはいろいろと苦心した。始めて寄付金を頼みに出た一老など大店の番頭さんと渡り合って泣かされたり、時には悔しい思いをして帰ることもあった。併し、法縁のお蔭に依り昭和18年無事入仏式が行われた時



皇室ゆかりの御所人形

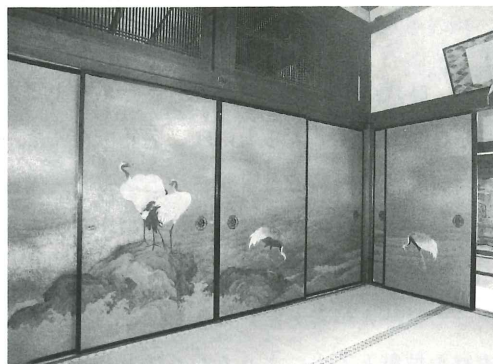


だい しょう じ
大 聖 寺

(京都市上京区烏丸通上立売下ル)

当寺は、永徳2年(1382)に足利義満が光厳天皇妃の法名をもって創建された臨済宗の門跡尼寺で、御寺御所とも呼ばれる。

歴代皇女が、相次いで住持し特に第六世覚鎮禪尼の代には、正親町天皇から「尼寺第一」という宸翰を賜わり、又、明治維新以降は上臈役をつとめた華族の皇女が住持するところとなった。創建以来、兵火などによりしばしば寺地を変え、現在地に移ったのは元禄10年(1697)と伝える。その後、天明の大火により堂宇の大部分を焼失した。現本堂は、昭和18年東京青山御所から移築されたものである。寺宝として皇室関係の什物が多数伝わり、とりわけ宸翰、御所人形、玩具類を数多く所蔵している。



宮御殿襖絵(「波に鶴図」伝・望月玉川筆)

は、どんなにか有難かった事か。戦中戦後は、食料にも事欠く時代で庭木の手入れもままならず乎長と呼ばれる松に松喰虫が入り、とうとう枯らしてしまった。多分これも元禄10年、明正天皇の河原の御殿の木石を御妹宮が御戴きになられたのであろう。惜しい事をしたと今でも悔やまれる。そのような苦勞のなかにも子供の頃はよく、昨年、京都市の指定文化財となった枯山水の橋の上で椿の花を散らして遊んだり、ままごとをしたり、御弁当をこしらえ築山の上に筵をひいて食べるのは遊山気分^{つきやま}で楽しかった。そんな遊びたい盛りも庭掃除に動員されたり、毎朝御仏壇を清めるのも車井戸の水をカラカラ汲み上げ、つやが悪くなるからと冬も決して湯を使わせて貰えなかった。又、若い頃は梅雨の

夜など懐中電灯を持ってどこか雨漏りはしていないか、孝明天皇御下賜の人形の箱が濡れてはいないかとよく夜廻りをした。庭を広々と見、仏に仕える心は閑雅でも雨につけ風につけ心を痛めねばならぬことは大変な事である。

(大聖寺 門跡)



江戸時代中期の作庭といわれる大聖寺庭園(京都市指定)

京のみちを歩く 〈5〉

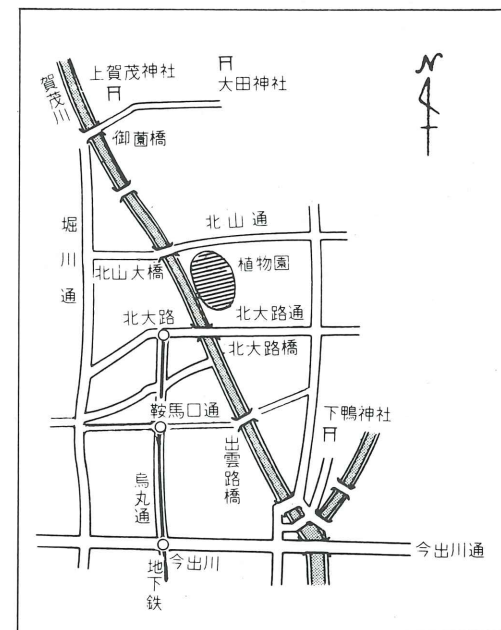
《賀茂堤から大田神社へ》

京都の三大祭のトップを切って5月15日に葵祭がおこなわれる。御所での「宮中の儀」、御所、下鴨神社、上賀茂神社とすすむ勅使の行列である「路頭の儀」、それと両社での「社頭の儀」からなっており、その中心をなす「路頭の儀」はまさに王朝絵巻の再現である。葵祭の行列は、下鴨神社で祭儀を終えたあと上賀茂神社に向うわけであるが、下鴨から上賀茂に至る賀茂川の西の堤は松並木とならんで椋の大樹の青葉若葉が五月の空に手を広げたようで実に美しい。広い河原のはるか向うには比叡山の山裾から南にくっきりと幾重にも山並みが延び、大文字山がさらに続く東山連峰との区切りをつけている。この西の堤は、御園橋で終わっているが橋上にたつとはるか上流には雲々畑の山々が前後左右に重なりあい、飛び交うユリカモメがいったいその興趣を添える。橋を渡り社家町の古い土堀に沿ってさらに東へ進むと大田神社があり5月下旬には天然記念物のかきつばたが沼沢を紫の花でいっぱい飾る。

—「京のみちを歩く」京都市文化観光局観光課発行より—



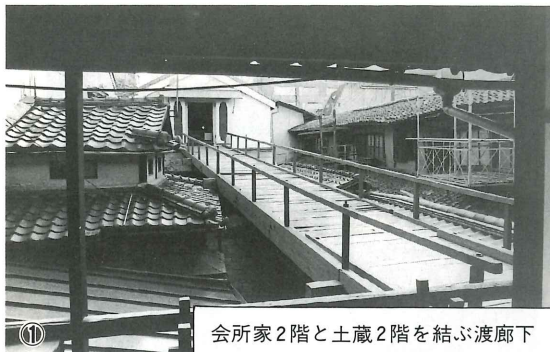
賀茂街道をゆく葵祭行列



祇園祭と町会所

江戸初期から明治にかけて、京都のまちには住民の会合や寄合いのための施設として各町毎に町会所が設けられていました。しかし、今日ではその町会所も祇園祭の山鉾町にしかその古い姿を見ることはできません。

今回の目で見る京の文化財は、伝統的な町家建築として保存され又、祇園祭に欠くことのできない施設である町会所をとりあげ、その代表的なものをご紹介します。



⑪ 会所家2階と土蔵2階を結ぶ渡廊下



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

祇園町山鉾町の主な町会所一覧

町 会 所	町 名	山 鉾 名	所 在 地	建 築 年 代		
				会 所 家	土 蔵	社 ・ 堂
1	小結棚町	放下鉾	京都市中京区新町通四条上ル	慶応3年(1867)	嘉永2年(1849)	———
2	天神山町	霞天神山	〃 中京区錦小路通室町西入	明治19年頃(1886)	文政9年(1823)以前	大日堂・明治19年(1886)
3	箏 町	孟宗山	〃 中京区烏丸通四条上ル	明治8年(1875)以後	明治元年(1868)	地蔵堂・明治元年(1868)
4	燈籠町	保昌山	〃 下京区東洞院通高辻下ル	明治3年(1870)	文化5年(1808)	稻荷大明神・昭和32年(1957)
5	長刀鉾町	長刀鉾	〃 下京区四条通烏丸東入ル	明治初期(1868～)	天保4年(1833)	大日堂・建築年代不明
6	三条町	八幡山	〃 中京区新町通三条下ル	明治末期(～1912)	寛政12年(1800)	八幡宮・明治13年(1880)
7	鯉山町	鯉 山	〃 中京区室町通六角下ル	建築年代不明	大正2年(1913)	地蔵堂・建築年代不明
8	橋弁慶町	橋弁慶山	〃 中京区蛸薬師通烏丸西入	明治16年頃(1883)	明治18年(1885)	———
9	山伏山町	山伏山	〃 中京区室町通蛸薬師下ル	慶応2年(1866)	嘉永6年頃(1853)	———
10	占出山町	占出山	〃 中京区錦小路通室町東入	———	享和2年(1802)	神功皇后宮・明治3年(1870)

・(1)～(4)は、京都市指定文化財
・祇園祭山鉾連合会刊「講座記録 祇園祭」参照

(写真提供：西山治朗氏・(財)八幡山)
保存会・京都市文化財保護課



わたしと京の文化財（12）

ほこの上

笹岡隆平

「ほこの上ってどんなのかなあ。」

そんなことを考えながら、多勢の人達に見守られ、ぼくは人足さんのかたにかつがれて、ほこの階段をのぼった。階段の一番上に着くと、そこで人足さんは体の向きをかえて、ぼくをみんなに見せる。“みかえり”といって、一番いい顔を見せるのだよと、いわれていたの、ぼくは何ともないような顔をしていたが、実は心の中では、「落ちないかな」とびくびくしていた。

いよいよほこに乗りこむ。しばらくして、ほこが動き出した。なかなかいい乗り心地だ。きん張していたせいか、がたがたゆれるのをほと



稚児社参（写真は筆者）



しめ縄切り（写真は筆者）

んど感じなかった。しばらく進んで、しめ縄の前ではこは止まった。ぼくもまわりの人達もみんなが心配していた“しめ縄切り”だ。うまく切れるかどきどきした。稚児係さんがぼくの手をうしろから動かしてくれる。まず右から左へ一ふり。次に左から右へと一ふり。それを二回繰り返した。頭の上に刀をあげて、おもいっきり下へふりおろす。パシッ。カタッ。しめ縄が切れ、板がゆれた。みごとに二つに切れた。ぼくも、そしてしめ縄をひっぱって下さったかむろのお父さん達もみんなほっとした。見ていた人達が、「わあっ。」といって手をたたいて下さった。本当にうれしかった。それからしばらくして、太平の舞を舞う。おもいっきり体をほこの外に出して舞うので、ぼくは、やはりきん張した。でも、お父さんや、おじいちゃんがしっかりと足をおさえていてくれたので、がんばって体をのばした。一度すると、もう自信がついて、あまりきん張もしなくなった。下を見おろしても何とも感じない。けれども辻回しの時は迫力があっておもしろかった。一しゅんほこがたおれるかと思うくらいゆれていたが、上手にほこはまわっていった。もうほとんどおわった

ようなものだ。そう思うと、急に暑くなった。かんむりで頭がとてみたい。かむろの友達も、おはやし方さんも、お父さんも、おじいちゃんも、ほこ町の人もみんなきつと暑かっただろう。ほこからおりと、もうくたくたにつかれています。

た。でも、今はまた、あのほこの上にもう一度乗りたいなあと思う。しめ縄切りも、辻回しもみんなとても楽しかった。

（昭和60年祇園祭長刀鉾 稚児）

京の主な年中行事（5月～9月）

5月

1～3日 千本えんま堂狂言 千本えんま堂
（1・2日午後7時 3日午後1時・午後6時）

1～4日 神泉苑狂言 神泉苑
（午後1時～6時 3・4日は午後10時まで）

3日 流鏑馬神事（午後1時） 下鴨神社

5日 賀茂競馬（午後3時） 上賀茂神社

5日 藤森祭 藤森神社
（駆馬行事 午前11時10分・午後1時・3時）

15日 葵祭（午前10時半出発）
（京都御所～下鴨神社～上賀茂神社）

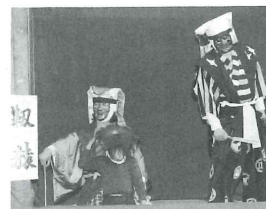
18日 三船祭（午後2時） 嵐山

6月

1・2日 京都薪能（午後5時半） 平安神宮

10日 田植祭（午後1時） 伏見稲荷大社

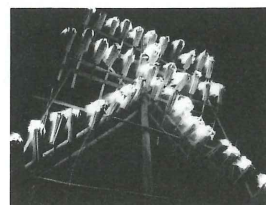
20日 鞍馬竹伐り会（午後2時） 鞍馬寺



千本えんま堂狂言



松尾大社御田祭



雲ヶ畑松上げ



烏相撲

7月

1～29日 祇園祭 八坂神社と各山鉾町
（10日 神輿洗・お迎え提灯
17日 山鉾巡行（午前9時出発）
24日 花傘巡行（午前10時出発））

20日 御田祭（午前10時） 松尾大社

20日 きゅうり封じ（午前6時～） 五智山蓮華寺

20日 御手洗祭（午前5時～） 下鴨神社

31日 千日詣り 愛宕神社
（午後9時～翌午前2時）

8月

1日 御手洗祭（午前5時～） 下鴨神社

7～10日 若宮陶器大祭 五条坂一円

7日 夏越神事（午後7時） 下鴨神社

15日 花背松上げ（午後9時頃） 花背

15・16日 松ヶ崎題目踊 涌泉寺
（15日午後8時半 16日午後9時）

16日 大文字五山送り火（午後8時） 各五山

23日 久多宮ノ町松上げ（午後9時頃） 久多

24日 広河原松上げ（午後9時頃） 広河原

24日 雲ヶ畑松上げ（午後8時頃） 雲ヶ畑

24日 久多花笠踊（午後9時頃） 久多

27日 修学院紅葉音頭（午後8時） 修学院離宮前

9月

1日 八朔踊（午後8時） 江文神社

8・9日 烏相撲 上賀茂神社

（8日 午後8時内取式 9日 午前10時 重陽の神事）

8日 上賀茂紅葉音頭（午後8時） 上賀茂神社

※都合により行事・日程が変更される場合がありますので
ご了承下さい。

賀茂競馬

新緑のさわやかな5月をむかえると、京都は代表的な祭や行事が数多くおこなわれます。

なかでも、5月5日 上賀茂神社においておこなわれる賀茂競馬は、平安時代に起源をもつと伝えられる京都ならではの伝統行事です。



賀茂競馬 について

賀茂競馬保存会々長

阿部 信

上賀茂神社の競馬は、堀川天皇の寛治7年(1093)五穀成熟を祈念して、宮中武徳殿の競馬の式を奉納したのが始まりで、二十頭、十番で行なわれ、以来今日まで絶えることなく継続されています。

5月1日は「足汰式」といい、一頭づつ馬を走らせ、馬の毛付、年齒、遅速や乗尻(騎手)の技術の良否を調べて番立を定めます。この時、馬を走らせると同時に乗尻は声を張り上げながら鞭を打ち、又、三度検査役の座(馬場殿)に向って鞭を差さなければなりません。これらにより二頭一番で走らせます。

5日は、午前10時より「菖蒲の根合せの儀」といって、左右の番毎に二ヵ所で菖蒲の御屋根葺きと根合せ(菖蒲の長短、大小を競って取替をする)を行ないます。午後1時、乗尻、所役



は装束を改め(乗尻左方は舞楽装束の打毬楽<赤>、右方は同鉾鉾舞<黒>)神社に出仕し、勸盃、勝栗の儀等を済ませ本殿前にて乗尻は奉幣(勝負と安全の祈念)を行ない、3時半頃乗馬、二頭一番で順次調教の後、競走させます。

この競馬は、武田流と大坪流の馬術を取り入れ、俗に悪馬流ともいい、どんな荒馬でも乗りこなすという特種な乗馬方法で、勝負を争うことには変わりありませんが、一般にいう競馬と異なるところは二頭で争い、出発点は二馬長身も離れており、又250メートルという短い距離を鞭が折れんばかりに打ち、全速力で競争するので、馬を止めるのにも相当荒っぽい方法で行なうことになります。又、儀式競馬であり、乗形、作法等にも厳しいものが要求されますので、練習は主に木馬で行ないます。馬具類



木馬を使って馬術の練習をおこなう

も日本古来の様式ですのでおのずと乗り方も異なります。鞍、鐙、轡等は江戸時代の物を用いていますので傷みがひどく、又乗手等も社家の子弟に限られている事などから減少し、維持が難しくなって来ております。

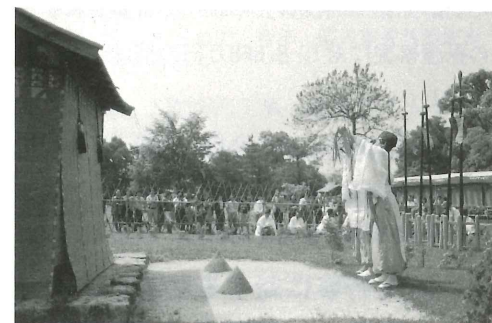
(上賀茂神社 宮司)

◇賀茂競馬行事

5月1日	競馬会足汰式	(午後1時半)
5日	菖蒲の根合せ	(午前10時)
	本殿祭	(午前10時半)
	競馬会の儀	(午後2時)
	競馳	(午後3時)



足汰式



菖蒲の根合せ



5月5日の競馬



写真 上：神前での儀式 下：乗尻(騎手)の装束

保護財団の活動

昭和60年度

文化観光資源保護事業補助金交付

四五行事・文化財修理など

96件に対し総額8,668万円を助成!!

去る3月24日京都都ホテルにおいて開催された当財団第34回役員会において審議され、96件の保護事業に対し8,668万円の補助金の交付を決定した。

この補助金は、全て会員の皆様方からお寄せいただいた寄付金をもとにおこなっているもので、今回の補助金交付内容は、次のとおり。

1. 四五行事に対する助成

9件 補助金 4,758万円

—対象—

- 葵祭行列執行
- 祇園祭山鉾巡行執行
- “ 山鉾修理
- 大文字五山送り火点火執行
- “ 火床整備（4件）
- 時代祭行列執行



—祇園祭 四条傘鉾— 明治4年を最後に途絶えていたが、昨年およそ100年ぶりに復元された。



—大徳寺南門— 江戸時代初期の建築様式を伝え、今回解体修理工事がおこなわれた。



—日向大神宮内宮本殿及び拝所— 伊勢神宮と同じく内宮、外宮からなり神明造りの建築様式を伝えるもので、今回屋根葺替工事がおこなわれた。

2. 文化観光財保護事業に対する助成

43件 補助金 2,853万円

○建造物の部

—対象—

賀茂別雷神社摂社大田神社拝殿屋根棟修理、末社福德社屋根葺替工事及び中門玉垣取替工事、末社梶田社屋根葺替工事、末社山森社屋根葺替工事・大徳寺南門修理工事・興聖寺仏殿修理工事・平安神宮東西外廻廊及び東西歩廊屋根修理工事・霊鑑寺仏堂屋根葺替工事、本堂渡廊下解体改築工事・聖護院長屋門解体修理工事・寂光寺本堂屋根葺替工事・退耕庵書院屋根葺替工事・海蔵院本堂屋根葺替工事・仲源寺本堂露盤、擬

宝珠修理工事・日向大神宮内宮本殿及び拝所屋根葺替工事・毘沙門堂山王社屋根葺替工事・本願寺派本願寺山科別院鐘楼屋根葺替工事・松明殿稲荷神社稲荷社拝所床張替及び玉垣修理、天満宮覆屋根修理、手洗舎屋根修理工事・仁和寺乾門修理工事・大覚寺明智陣屋屋根葺替工事・妙心寺浴鐘楼屋根葺替工事・長福寺護摩堂屋根葺替及び基壇亀腹修理工事・勝持寺内仏殿屋根葺替工事・御香宮神社総馬堂屋根葺替工事・理性院客殿屋根葺替工事・宝塔寺鼓楼屋根葺替工事

○美術工芸品の部

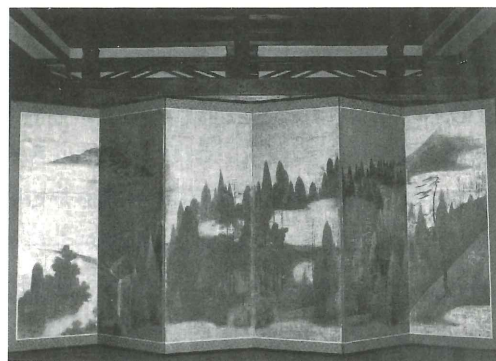
—対象—

相国寺開山堂舞良戸襖絵修理・慈照院李氏朝鮮通信史漢詩文水墨画修理・立本寺本堂須弥壇後壁貼付絵紙本墨画「十六羅漢図」修理・本久寺六曲一隻屏風紙本墨画「龍の図」修理・禅林寺六曲一隻屏風紙本金地著色「山杉図」修理・退蔵院本堂襖絵紙本墨画「山水図」修理・海福院書院襖絵紙本墨画「山水図」修理・薬師寺木造観音菩薩立像修理

○防災施設の部

—対象—

孤篷庵土蔵修理工事・大報恩寺防災施設設備



—紙本金地著色「山杉図」屏風（蔵 禅林寺）— 土佐光信の作品といわれる。



—嵯峨大念仏狂言— 昭和51年以来当財団で助成をおこなってきたもので、今年、国の重要無形民俗文化財に指定された。

工事・大聖寺土蔵修理工事・曼殊院ドレンチャ—設備工事・新熊野神社自動火災報知設備工事・十輪寺自動火災報知設備工事・醍醐寺土蔵修理工事

○環境整備の部

—対象—

黄梅院土塀修理工事・北野天満宮東門北側築地塀修理工事・法界寺山門両側土塀修理工事・（財）京都古文化保存協会松毛虫駆除事業・（財）霊山顕彰会霊山一帯及び各招魂社周辺整備事業

3. 伝統行事、芸能保護事業に対する助成

44件 補助金 1,057万円

—対象—

〔行事—13件〕

嵯峨お松明・賀茂競馬・藤森駈馬・糺の森流鏑馬・鞍馬竹伐り会・松上げ（3件）・鳥相撲・ずいき祭・北白川高盛御供・鞍馬火祭・日野裸踊

〔芸能—31件〕

けまり・雅楽（3件）・念仏狂言（4件）・六斎念仏（11件）・やすらい花（4件）・久多花笠踊・八瀬赦免地踊・松ヶ崎題目踊・鉄仙流白川踊・紅葉音頭（2件）・大原八朔踊・番匠儀式

昭和60年度 伝統行事芸能功労者表彰

—11名の協力者の方々に感謝状贈呈—

長年にわたり
京都の伝統行事、
芸能の保存と継
承につとめてこ
られた10名の功
労者及び当財団



受賞された方々

の基金募集に多額の寄付金を寄せられた11名の
方々に対し当財団第34回役員会の席上において
会長である今川京都市長及び佐伯理事長よりそ
れぞれ表彰状、感謝状、並びに記念品が贈呈さ
れた。

受賞者は、次のとおり。（敬称略・順不同）

□ 伝統行事・芸能功労者

谷端 広穆	糺の森流鎬馬神事保存会
外村 利一	西之京瑞鎮神輿保存会
石原 浩	壬生大念仏講
山中彌一郎	吉祥院六斎保存会
戸倉 貞和	久世六斎保存会
橋本 治夫	中堂寺六斎会
松尾 繁造	円覚寺六斎念仏講保存会
鈴木 信治	八瀬童子会
成田 くに	上賀茂紅葉音頭保存会
土井清一郎	大原伝統文化保存会

□ 文化観光資源保護協力者

（個人）

弘津友三郎・黒川武男・竹村陽子・竹村 卓・
今井栄一・中島次郎・渡辺幸子・竹内孫兵衛・
満岡忠成・寺田穎子・井上嘉久

第45回 文化財特別参観のご案内

‘法然院’と

‘白沙村莊’

今回は、法然上人ゆかりの静かなたたず
まいを残す法然院と日本画の巨匠橋本関雪
の邸宅 白沙村莊を訪ね、見学いたします。

- 回 参観日時 昭和61年 9月27日(土)
午後2時(参観時間約2時間)
- 回 対 象 者 財団募金協力者(会員)とその
家族
- 回 申込方法 住所・氏名・年齢を記入し、
返信用切手60円分を同封の上、
封書によりお申し込み下さい。
- 回 申 込 先 〒606 京都市左京区岡崎最勝
寺町 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団宛
- 回 参加費不用
- ※お問い合わせは、財団事務局まで。なお、
参加ご希望が多い場合は、制限するこ
とがあります。

編集後記



回今回は、祇園祭を中心にお送りいたしました。
昨年、祇園祭長刀鉾の稚児をつとめられた笹岡
隆平君にその思い出をつづってもらい、又、祇
園祭山鉾町の主な町会所をとりあげ、宵山の飾
り席をそれぞれ紹介しました。

回昭和60年度の四大大行事や文化財修理、伝統行
事芸能に対する補助金の交付をおこないました。
当財団が設立されて以来、今回のをあわせま
すと1,531件、総額10億7,356万円の助成をおこ
なったことになります。これも会員の皆様をはじ
め関係各位のご協力のたまものであり、紙面を
かりてあらためてお礼申し上げます。

—差別をなくして明るい社会をつくろう—